

## 新刊紹介

## ○地震

中村左衛門太郎著

大正十三年四月發行

文化生活研究會

定價貳圓五拾錢

## ○地震講話

今村明恒著

大正十三年四月發行

岩波書店

定價貳圓

大正十二年九月の關東大地震で一般の興味が平素全く顧みられなかつた所の地震學に向いた機會に、數多の地震に關する著書が現はれた。其何れもが學術的に何等の満足を與へないものであつたが、茲に中村、今村兩博士の著書が殆んど同時に現はれたのは、苟も斯學に興味を有する好學者に取つては非常なる期待を持つて迎へられねばならぬものである。我國で地震學に關して纏つた書物としては從來故大森博士の地震學講話と今村博士の地震學との二種に過ぎなかつたのであつて、今日此二書を加へたのは聊

か意を強ふるものとせねばならぬ。兩書を讀んで第一に氣の附く所は兩著者が一般に了解せられる様に平易に記述せられて然も今日の學問としての正鵠を失せざる様に努められた事である。而して兩著者は地震學に對する立脚地を少しく異にして居られるのであるが、平易なる記述の内に此の特色を注意する事は一段の興味を誘ふものである。中村博士は其序文に斷つて居る様に一層理論的な地震學を書かうとして居たに相違ないが、此の書の程度の記述に止められた事は定めて著者自身に不満に感せられた事かと思ふが、時機が時機であるから此の形のものが最も歡迎せらるべきである。今村博士が今日震災豫防調査會の中心活動者として其著書の中に地震豫知問題や震災輕減問題を取り扱はれたのは又其特色として其勞を多とせねばならぬ。特に卷末附録大地震調査日記が全卷の半以上に及んで居て、地震學の書物としてよりも著者の地震研究態度を窺ひ知る事の出来るものとして特殊の興味をそゝるものである。中村博士は其

特有の研究である所の津浪に關する記述詳細に渡り、更に震源の模様と言及して從來の地震學に新たななる方面を加へ、其著書を他に比類なきものとした。

紹介者は我國一般の讀書界がこの二書を非常なる興味を以て迎へる事を信じて疑はぬ。而して此二書を読んで地震學が今日までの如く顧みられざるべきものでない——特に日本の如き國に於て地震學が一層の慎重さを以て取扱はれねばならぬ事を了解するであらうと信ずる。但し總ての學問に於てそうである如くに、地震學に於ても此の二書を以て盡きて居るものではない。此二書を讀了して地震學に對して起されるであらう、興味は更に讀者を驅つて一層深き研究を欲する好學心を起さしむべきは必然であつて、第三、第四の良著書の斯界に携はる權威者によつて公にせられる事を期待すべきではあるまいか。(松山)

### ○綜合世界經濟地理

石橋五郎著  
富山房

大正十三年四月十八日發行

本書は中等程度の實業學校に於ける、最上級用

の教科書とし、兼て一般地理學習者の參考に供せんとの目的で書かれたものである、綜合と冠してある通り世界住民の經濟生活を綜合して記述し、特に我國の生活が世界に於て重要な地位を占むる部門に就きては章を別ち節を設けて解説がしてある。緒論、産業、交通、商業の四篇から成立し、多くの地圖圖書を挿入し統計類は概ね一九二〇年乃至一九二二年の最新のものによつてある、菊版百五十五頁の薄い本ではあるが農産、水産、林産、牧畜、鑛産、工業及工業に關して要領を集約して記述してあるから、精確な概念を得るに尤も適當し、交通地理及世界の商業に關しても精密親切に記述してあることが何より喜ばしい點である。本の性質上、行文流暢美辭佳句巻を播いて厭くことなしといふ風ではないが、極めて短かい字句の中に廣く深い意義を寫してあるので、讀みつゝある間に啓發さるゝ點が多い、從來我國に此種の著述がないので、文檢學驗などの參考に苦んだ人が多かつたであらうと思ふ、従つてさういふ目的の

人や、或は中學校女學校などで世界地理を教授する際に、經濟上の事柄を附説したいといふやうな人のため、こよなき良參考書を得たこと、信ずる強て缺點を云ふならば何分薄い本であるから所々に隔靴搔痒の感がないではない、従つて他日大經濟的地理書の發行を期待するのは豈予一人のみならんやである、妄評多罪(定價壹圓五拾錢)

序に云ふ石橋教授の商業學校向きの教科書として三訂實業教科地理教科書日本及外國の部がある、同じく富山房の發行であるが、併せて經濟地理學の參考本として推奨する。(藤田)

### 質 疑 應 答

(問) 本邦地質圖の手頃なるもの承りたし

(新潟、M・T 生)

(答) 一)地質調査所編

百萬分一地質圖(東京神田東陽堂發行約六圓)

(二)同

二百萬分一地質圖(東京、丸善發行定價五圓)  
右は共に震災に罹り現今は手に入ること難かるべし古本屋に就て搜す必要あり、神田裏神保町長門屋書店に聞合はずべし、又四十萬分一地質圖は目下地質調査所にて新版發行計畫中この事なり。(チカムラ)

(問) 氷山の接近し來る時には海水の溫度が俄に昇る理由如何といふことが小川先生の中地理學の間の中に見えますが、御説明を願ひたい(地球一讀者)

(答) 氷山は淡水の氷結したものであるから攝氏〇度であるが、氷山を流してゐる所の兩極地方の海水の溫度は鹹水なるが爲めに(一)二度位まで過冷 undercool されて氷結しないのである。それ故氷山が來ると暖かい物が流れて來ることになつて水溫が俄かに高まるのである。航海者は「ハインズ」測微寒暖計を船に附けて、其の急に昇るのを見て氷山の接近するのを知り、其の危険を脱することが出来る。是は教科書には見えぬが氷山の處(海水)に入るべきである。(下田)